

茶の湯文化学会会報 No.65

第65号 / 2010年6月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

上田宗箇の茶

上田宗箇

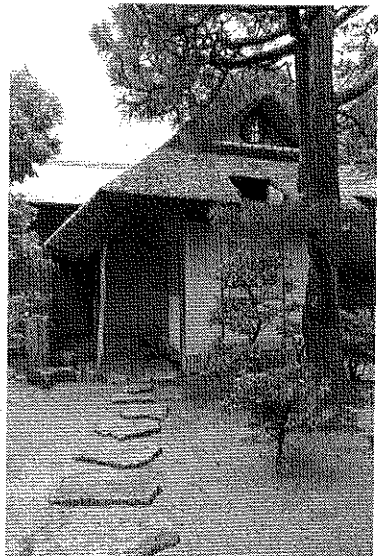
上田宗箇は、初め丹羽長秀に仕え、豊臣秀吉の側近くに仕え、一万石を知行し大名となる。関ヶ原合戦では西軍に与し、敗れた後、紀州太守浅野幸長に招かれ、大坂夏の陣後、元和五年(一六一九)浅野長晟の広島移封に従い広島へ入国、広島県西部一万七千石を知行する。

茶の湯は、始め六年間利休に学び、二十三年の長きに亘り織部に師事する。関ヶ原合戦(一六〇〇)の二年後慶長七年、宗箇が浅野幸長に招かれた翌年慶長八年(一六〇三)から幸長の没する前年の慶長十七年(一六一二)の九年間、幸長が宗箇を通して尋ね、織部が答えた「茶道長間織答抄」が龍谷大学で見いだされた。慶長年間の武将の茶が織部や宗箇から生き生きと語られる一級の資料である。織部と宗箇の間答の節々に二人の師、利休の事が述べられており二人の師が利休であったことが良く解る。

最近になり島津家文集の中より、慶長十七年の古田織部より島津義弘への手紙が判明した。古田織部の名代として、島津義弘へ薩摩焼の指導に宗箇が薩摩に赴いている内容である。薩摩焼の指導に織部が直接関わっていたこと、又、織部の茶陶指導に宗箇が深く関

わっていることが判明、興味は尽きない。二代將軍秀忠の時代、室町將軍家の式正御成に茶事が加わった。数寄屋御成は、御成門から入御されるのではなく、ま

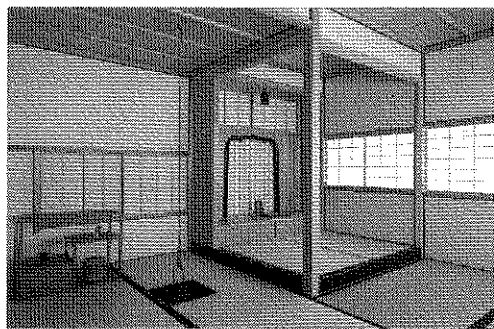
ず露地口から数寄屋へ入る新しい御成の様式である。その指導的な立場に織部がいた。



茶室 遠鐘

織部は、利休の極小の小間に対し空間に拡がりをも求め、三疊台目一疊通(織部格という)の茶室を造る。一會の茶事で移動を好まなかった利休に対し、後入濃茶の後、一疊の通いを通り別席を設け移動、その席を「鎖の間」と称した。織部は、鎖の間を「茶の書院で

ある」と述べている。茶事後、廊下を渡って書院屋敷に移動という織部の茶の流れが数寄屋御成として格式付けられ、江戸時代末まで各大名家の茶の様式として広く伝えられた。



建溪 鎖の間

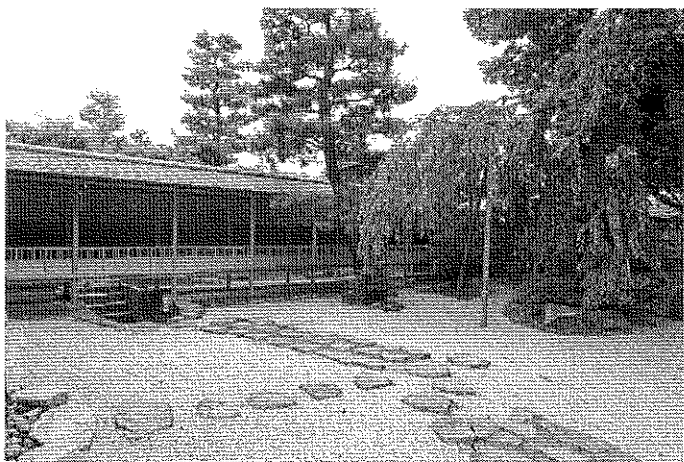
上田宗箇が元和六年(一六二〇)広島城内に造営した上屋敷は詳細な絵図面が残されている。当時の数寄屋御成の叶う構成となっており、数寄屋御成の始めと伝えられる将軍秀忠が、加賀前田家上屋敷への御成の三年後であり、初期数寄屋御成の詳細を知る貴重な絵図と言われている。宗箇は、織部の最も近くにいた一人であったので、当然の帰結であったのであろう。

広島に入国した宗箇は、野村休夢・中村知元に各々百石を給し家臣として召し抱え、野村家・中村家は上田家茶事預りと称した。

江戸中期となり、茶道人口も増加する中、千家で逸速く家元制度が登場、文化・文政年間(一八〇四〜一八二九)今日の相伝様式が千家で確立したと言う。上田流でも、芸州の武家だけでなく町衆や関西・中四国にも門弟が拡がり、新しい対応を求められ、茶事預り野村餘休・中村泰心らによって天保十年(一八三九)頃には新しい相伝を確立する。その中で、乱・真台子は主家(上田家)に届け出ることで、免状は茶事預りが発行することが明記してあり、武家茶道として伝承形態が確立している。『宗箇様御開書』に「宗ヶ様にも織部殿より伝を受けられ」とある様に宗箇以来連綿として上田流の源流は織部であることを、真台子の免状で明記している。

明治維新により藩は消滅、各大名家に抱えられた御茶道も失職。幕末から明治にかけ上田家当主は、十二代安敦であった。明治三年隠棲し、剃髪し讓翁と号し、明治二十一年亡くなるまで茶事を楽しみ、始祖宗箇を彷彿させる。讓翁は、茶事預り中村快堂・野村円齋を明治期になってもそのまま抱え、茶事預り

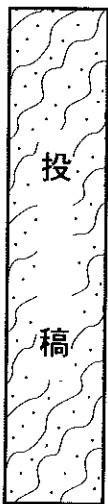
制度は昭和三十年迄続いた。明治に入り下屋敷に移り、昭和初期現在の地に移っていた為、被爆を免れ、屋敷・茶室・古文書・美術工芸品は被害を免れた。上屋敷絵図の詳細が残されており、三十年前現在地に上屋敷の構成再現を思い立ち、一昨年、百三十七年ぶりに再現する事が出来た。



書院庭園と廊橋

再現して感じるのは、数寄屋の侘びと対極にある鎖の間は、全ての壁が貼り付け壁、二畳の上段を備えた雅な開放感のある魅力的な空間である。数寄屋・鎖の間として廊橋を通じて、日常空間である書院屋敷が一体となつて構成され、動きのある広がりがある空間が魅力である。

もう一つは、鎖の間から書院屋敷に移る廊橋は正に能の橋掛、広い書院庭園と書院屋敷、一瞬にして別世界になる。宗箇は家康の命により名古屋城二の丸庭園を作庭、書院屋敷に廊橋を設け、その先には能の石橋をテーマに力強い豪快な石組みの庭を作庭し、現世に到来した家康の治政を讃える。上屋敷の廊橋の先は茶寮和風堂。宗箇にとつて和風堂は、現世を超越した魂の彼岸・浄土だったのでないかという感慨である。



「茶花」の源流を求めて(その二)

米村孝月

世に「月に叢雲、花に風」の謠があります。柳の枝を例に話をすると、風吹くこと、雨降ることは、時として柳の枝を曲げたり折った

りして、柳の枝の成長を妨げるものです。ところが柳の枝の先端をよく観ると、風や雨を我が友として、二葉を開いて成長しています。このようにして柳が生長していく姿を観ると、そこには人が学ばなければならないことが多々あることを、人は悟り知るものです。更に説明すると、草や木が自然のなかで成長して行く姿には、時として、人が学ばなければならぬ事(いと)みがある。そのような野の草花の姿を切り取り、いびつな花瓶に生けて床の間に居(す)えたのが、花の道の「生け花」であり、茶の道の「茶花」だったのである。

では、何故、そのような「いびつな花瓶」を義政は好んで鑑賞したのでしょうか? それは、義政自身が、自己の繁栄と完成を、希(こいねが)わなかつたからです。他人と争うのではなく、親睦を深める。つまり仕事や立場の違いを抜きにして、共に遊び、共に飲食をすることで、人の心と心を強く結び付けたいと願った。引いては、争い事をなくしたいと考えたのです。その思いから「いびつな花瓶」を飾るに至るのです。

「いびつな花瓶」は、見た目に麗しいものではありません。しかしながら、その花器に野の花を生けたとき、そのいびつな姿がかえつ

て野の花を生かす役目を果たしている。とともに、ぽっかりと空いた義政の心を埋めてくれていることに、義政は気づいたのである。

自分だけ一人が輝こうとすれば、争いとなる。そうではなく、いびつな花瓶が野の花を生かしているように、自分の身の回りにいる相手を輝かしてやるのが大切だ。そうすれば、必然的に自分も輝くことができる。

義政はそう考えたに違いありません。相手の言いぶんや立場を大幅に認め、譲れるものは譲り合う。そうすれば互いの間にある蟻(わかま)りを埋めることができ、他の人と、より親睦を深めることができる。そこに「和」、つまり協調的な関係を保つ秘訣がある、との考えに至るのです。

ここに載せた絵図は、私蔵の「座敷飾りの次第」が載せているもの。青磁の花瓶の口からは、ルリ色の粕釉が幾筋も垂れ落ちていました。まさに、その姿は「いびつな姿をした花瓶」と呼ぶにふさわしいもので、正方形の敷板に載せることで、陰陽が和合した姿として表されています。そこに義政の本心を知る

とともに、我が国の文化が目指した方向性を見て取ることができます。

さて、私蔵の『君台観左右帳記』は、『花故実』（陽明文庫蔵）が伝えている「七つ飾り」の絵図とよく似た抛入花の絵図を載せると共に、左記の説明書きを添えています。

正式な床飾りは七つ飾り也。絵図、花瓶ともに四つ也。四幅対の掛け物は二幅づゝ相（あい）向かいあうなり也。花は（掛け物に）当たるように扱うべし。

能阿弥が最初に定めた正式な床飾りは「七つ飾り」。四幅対の掛け軸を掛け、その中央に香炉を居（す）え、左右に燭台（しよくだい）と花瓶をそれぞれ対に置き、花瓶には花を番（つがい）に生けると定めました。

対に飾る方式、つまり左右対称に床飾りをする方式は、中国から伝えられた思想が大きく影響していました。「七つ飾り」は、呼び名こそ奇数ですが、香炉を床の中央に置き、燭台と花瓶をそれぞれ左右対に置く。この飾り方は左右対称の思想にそったものだったのです。

私蔵の「座敷飾りの次第」は、当初は「七

いた喜びで互いに光り輝くものを感じることができ。そこに、茶の道の最も重要な奥義が成り立つのだ、と説くのです。

千利休が言う「数寄の大法」は、必ずしも茶の道だけが奥義として伝えただけではありません。この法則は我が国の庶民が普段の生活の中で日々経験してきたことでもあったからです。

自然災害の多い我が国では、庶民たちは自然災害を乗り越えるため、個人が各々の個別の立場をとるのではなく、他と協力し合うことでその困難を乗り越える必要があったのです。つまり自然災害という困難が、人の心を深く結び付けてきたのです。

義政は、応仁・文明の乱という戦乱を通して、「自分だけが輝くのではなく、回りにいる者を輝かしてやるのが大切だ」との思いに至ります。のちに千利休はそのことを「数寄の大法」として、彼の弟子たちへ「侘び茶の湯の奥義」として授けます。この二人が生きた時代、また言葉も異なっていますが、その底流に流れている主題は「共に生き、共に輝く」ことだったのです。

不完全なもの同士であっても、

つ飾り」であったものが、「五つ飾り」を経て、左右非対称の「三つ飾り」へと変化して行く過程を併せて伝えていました。そこには、

一旦は中国の思想を取り入れながら、のちに日本の国の文化に適應するよう変化させた様子が手に取るように分かります。例えば「正月元旦」をはじめ、三月の「ひなまつり」等々、

我が国の年中行事の多くが奇数日で、既存の文化には奇数を慶ぶ風習があります。そのことが、左右対称の「七つ飾り」が「五つ飾り」を経て、次に左右非対称の「三つ飾り」を生み、最終的にはここに載せた抛入花へと辿り着くのです。そこには応仁・文明の乱を経ることで、新たに芽生えた個人的自認があったのです。

足利時代中期に新たに芽生えた自認とは、不完全なことを自ら認めることです。この心の変化が『君台観左右帳記』を生み出すのです。そこには、それまでのように物により心が充ち足りることを願うのではなく、人の心と心が強く結び付くことで、心が満たされることを希（こいねが）ったのです。このことは「茶の道」「花の道」の奥義として、後の時代へと受け継がれて行きます。例えば、侘茶の湯を大成した千利休は川崎梅千代に宛

二人が結び合うことで、
完全なものとなれる。

ここに載せた抽入花の姿は、その主題に添って生けられていたのです。ですから、義政の心を満たしたのは勿論のこと、混沌とした現代に生きている私たちに「共に生き、ともに輝くこと」の素晴らしさ大切さを、無言で語りかけてきます（完）。

主な参考文献 筆者蔵書
君台観左右帳記 写本
挿花切紙口伝書 写本
御飾記 写本
古今・茶之湯諸抄大成（正徳三年刊） 刊本
図説。いけばな体系（角川文庫）。群書類従。その他



東京例会

（平成二十二年二月二十七日）

「楚石梵琦墨蹟―五島美術館本を中心に―」

福島洋子

本発表は雑誌『鎌倉』において、鎌倉ゆかりの禅僧の中世における日中交流としてす

てた手紙の中で、茶の道の奥義を次のように語り聞かせていました。

雨や雪が降ったりして天気が悪いときは、亭主から、今日の茶会を日延いたしましたよるか、と使いが差し向けられる。そのような使いが来たとしても、ご招待を頂いてますので必ず参りますと、《必ず》の文字を添えて返事をする。そこに、数寄の大法（たいほう）が成り立つのです。

利休が言う「必ず」とは、或る種の困難が起こったとしても、それに打ち勝つ行為のこと。人が生活して行くうえには、ある種の困難が付き物である。そのことを認めた上でその困難を克服してこそ、両者の心をより深く結び付けるのだ。そのためには他の人への思いやりが必要となり、そこに茶の道の「奥義」が生ずる。ここに言う「奥義」とは、例えば亭主から「雨が降り足場が悪いので、今日の茶会は日延べしましょうか」と客へ使いを出す行為。客はその行為に対して、「必ず参ります」と、「必ず」の一言を添えて返事を返す。このとき、亭主と客の両者は共に困難に打ち勝ったことを意味し、二人の心は深く結び付

に紹介した小論から、中国人僧楚石梵琦と日本人僧椿庭海寿の交流を五島美術館蔵の重要文化財「楚石梵琦墨蹟与椿庭海寿送別語」を中心に取り上げたものである。

まず墨蹟については種類が多岐にわたるため、スライドを交えながら作例を紹介した。次に茶会記から墨蹟の使用例をひき、次第に茶の湯のなかに浸透し、茶道具として定着していく過程を追った。最後に、墨蹟が書かれた状況について楚石梵琦墨蹟与椿庭海寿送別偈を中心に考察し、日中禅僧の交流をみるとともに、そこに墨蹟が書かれた一状況をも知ることができた。椿庭海寿への送別偈を書いた楚石梵琦は元時代末に活躍した禅僧。至正二三年（一三六三）に書かれたこの送別偈は椿庭海寿の中国での修業の様子を偈に詠み、天寧寺において半年間の交誼を結んだことを述べている。しかしながら椿庭海寿はこの年には帰国せず、再度楚石梵琦に別の送別偈を書いてもらっている。また帰国を取りやめてからも椿庭海寿は師の竺仙梵偈の語録に跋文をもらい双方の交流は継続されていた。日本僧が再度の帰国を試み、さらに中国の高僧に再度墨蹟を依頼していた当時の状況から、修業の証としてのみ書かれたような一過性の関係

の墨蹟とは異なり、継続的な交流をもった上で制作された墨蹟とがある。ことが指摘される。

(平成二十二年四月二十四日)

「『茶経』に記された甌の器形について」

水上和則

ここ数年私たちは、学芸大学高橋忠彦教授をリーダーに、「にんぶろ・茶文化班」として研究を続けてきた。今回研発表の内容は、その研究成果の一部である。

唐・陸羽『茶経』巻中、四之器に記された。と甌は、従来いずれも茶碗を表す言葉として特別に区別されることなく翻訳されてきた。しかしこの訳文では、茶碗の色および茶映りについて、内容的に矛盾がありつきりしなかった。

『茶経』テキストの分析や、唐代の他の文献を併せて検討した結果、明確な差異が読み取れ、また、考古学出土品からの検証でも、両者は異なる器形のものという結論を得た。甌は口径一六cm内外を代表とする玉璧高台をもつ平碗であり、甌は現代湯のみあるいは汲み出し碗と呼ばれるような深い碗の祖形であった。甌は前の年代に盛んに使用された形の碗であり、陸羽存命の頃は衰退期に入っ

ており、特殊な場所での使用を除いて一般に見る機会が少なくなっていた。また、甌は『茶経』が著された盛唐末年代に生産が始まり普及の兆しがみられる碗であり、唐の終焉まで使われた。今後研究を深め器形変遷を更に細かく追うことで、『茶経』著作時期を考古学的に考察できる可能性も出てきている。

二つの碗の器形が明確になったことで、『茶経』の記載内容がすつきり理解することが出来るようになった。また、記された七箇所の生産窯の碗類も具体的に追うことが可能となり、唐代喫茶手法の具現化に大きく近づくことができた。

「永青文庫の名物製」

佐藤留実

東京国立博物館において開催中の「細川家の至宝」展に先立ち、永青文庫で染織作品の合同調査をさせて頂いた。本発表では四件の茶入に付属する仕覆を取り上げ、それらの伝来状況等を考えた。調査対象の四件は①「唐物尻膨茶入 銘浅野尻膨」付属仕覆五点、②「唐物尻膨茶入 銘利休尻膨」付属仕覆三点、③「瀬戸肩衝茶入 銘出雲」付属仕覆八点、④「瀬戸肩衝茶入 銘塞」付属仕覆三点、で

ある。

①は「宗悟緞子」(紹鷗緞子)と「大燈金欄」が添っていた。②には寛書と添状が付属し、現在の仕覆三点は正徳六年十月付寛書にある「糸錦」(緋)、上代嶋廣東、「中古嶋廣東」に該当した。一方、『松屋会記』(天正十八年八月九日)の利休茶会では「袋シマ 緒ムラサキ」の「尻フクラ」が記され、現在の伝来品をそれに当てはめるならば、利休が用いた袋は赤・緑・白の縦縞で構成された木綿の「色替縞間道」(上代嶋廣東)ではないか。

③は、添状が付属し、袋八点は細川三斎か忠利のいずれが誂えたものか分からないという坂崎清左衛門による記述があった。これにより江戸初期にはすでに八点もの袋が存在していたのではないか。また、それらの仕覆は殆どが金欄であった。④は、『古今名物類聚』に記載する塞茶入の袋と一致する貴重な例と考えられた。

永青文庫では、本年十月二日より「永青文庫の茶入」展が予定されている。今後も同展に向けて調査を継続し新たな仕覆情報を明らかに出来ればと思う。

静岡例会

(平成二十一年十月二十四日)

「茶の湯とは」

倉澤行洋

「茶湯」という言葉は昔から使用していたが、読みは「チャトウ」または「サトウ」と読んで、意味は茶を使った飲み物であった。もう一つの意味は仏前に供えるお茶で、「チャノユ」という読みは室町時代の『文明本節用集』に出るのが早い例である。

「茶の湯」と「茶道」は同じであるのか。同じ意味で使う場合と違う意味で使う場合がある。「茶道」は、茶を通して心の在り様を深め高める道、これが第一の意味。そして高め深めた心から茶を行う道、これが第二の意味であった。

茶の湯は様々な文化要素を含んでいるものだが、ここでは茶道で求める人間像について述べてみる。

『山上宗二記』に「一座建立」と言う。主は客に集中し客は主に集中する、主は客の心を我が心とし客は主の心を我が心とする、このことよって一会の茶が成り立つということであるが、『南方録』に、客と主の互いの心持として、「叶うはよし、叶いたがるはあ

し」、おのずから叶うようにしなさいと言う。

「得道」した人はおのずから叶うが、未熟な人は叶おうとするからよろしくない、ということである。

曹洞宗の道元禪師は「感応道交」という言葉をよく使った。春になって暖かくなると、花が咲く、そういう風に人と人が自然に感じ応え合う。道元はこの言葉を著書『宝慶記』に「能礼所礼性空寂 感応道交難思議」と遺している。幕末の井伊宗観は、茶会の始めに「感応道交」の無言の一札が大切であると『一会集』に説いている。この「無言の一札」は無限の意味を含んでいる(維摩の一黙のごとくに)。江戸時代の良寛は「対君不語 不語意悠哉」と書き遺している。こういう主客の在り様を『南方録』では「直心の交り」と言う。

これが茶道で求める主客の在り方である。飲茶は中国から伝わったが、中国に茶道はあったのであろうか。陸羽の茶は同時代の人から「茶道」と呼ばれたが、「茶道」は、陸羽の師であり友であった皎然が、世界で初めて使った言葉であった。皎然は「茶道」を「得道」の語とともに用いていた。私は、陸羽・皎然の茶は、茶を通して心を深め高め、深ま

り高まった心から茶を行うという意味での茶道であったと思う。

茶道における主客の在り様の理想は花園天皇と大燈国師との問答によく現われている。「億劫相別而須臾不離 尽日相对而刹那不對」

「茶道の社会学的考察—P.ブルデューの文化的再生産論を中心に—」

大屋幸恵

個人の私的領域である好みや趣味、価値観といった文化的欲求は個人が属する社会階級と密接な関連を有する。とくに、文化に関連した趣味は、教育の産物であり、社会化の過程で獲得した行動様式の差異に基づく。「趣味は階層を刻印する」という。茶道をブルデューの文化の分類に当てはめると、「正統的文化」となる。これは、日常生活を営む上で差し迫った必要性に乏しいものであり、芸術と生活を切り離したものである。また、「文化資本」の面からみると、茶道具との関連から「客体化された文化資本」に重きが置かれ、さらにそれを有効に機能させるため「身体化された文化資本」がとりわけ重要になる。大学生を対

象にした二度の意識調査から、若者世代にとって、日本の伝統文化は以前にも増して「高尚化」「卓越化」と見られており、自分達の文化とは距離のある「異文化」となりつつある。急変する日本人の意識やライフスタイルを考慮し、新たな担い手確保のため、社会的見地からも戦略を講ずるべき時期にきている。

北陸例会

(平成二十二年三月二十七日)

「山中塗(じゅうと)」

前庭雅峯

丸物といえは山中漆器、と言われてきたが、評価の要因はいくつかの技術革新から始まる。良質の木地を挽くために、大正年間以来、新家熊吉によるベルト水車の轆轤、続いて大聖寺川電力開発利益による電気モーター轆轤と、轆轤の近代化に成功した。そして漆を塗った漆器を十数分ほど毎に自動的に回転させる回転ぶろ(塗師ぶろ)、手動式からぜんまい時計式、現在の電動式の回転ぶろ等、これらの発明によつて、木地が薄く、塗り垂れのない、精緻な丸物を、少量大量に生産できるようになった。

茶の湯の道具で、漆器として一番格式が高

いは棗であるが、寸分たがわぬ形が求められる棗では、木地とともに下地の工程も大変重要である。縦木から木地を挽くのが山中塗の特徴でもあるが、これに生漆をかけて木地固めをし、要所に糊漆をかけて補強したのち、棗なら下地として堅地を施していく。堅地は、最も手間のかかる下塗の工程であるが、輪島塗では、主に珪藻土を生漆と混ぜて厚く塗って下地を整えるが、山中塗では、珪藻土の代わりに砥の粉を使い、薄く何度も塗って形を整えていく。狂いを生じず、上品な薄仕上がり

の棗を作るには、根気と熟練の要る、必要不可欠な厳しい工程である。

棗の上塗の場合、身と蓋を一体で塗ったあと、両者を切り離すのを切り合い口(印籠合い口)、別々に塗るのを塗り合い口(京塗合い口)という。塗り合い口の方は、最高の腕と漆が必要となり、鯨のへらで塗ったりもする。これに蒔絵を施すことは、当然行なわれるが、平蒔絵、研ぎ出し蒔絵、高蒔絵の技法に加え、山中塗では土地柄もあり、加賀蒔絵の手法もある。

山中塗の棗は、道具全体の中で自己主張せず、茶人の心と道具の取合わせの調和の中に溶け込んで使ってもらえる物を目指している。

会場では、各工程、各段階の状態を実物でもご覧頂いたので、そのあたりの感覚もお分かり頂けたのではないかと思っている。

例会のご案内

東京例会

六月二十六日(土) (会場 五島美術館講堂 午後二時)

「芹屋釜の考察とその鑄造技術」

新郷英弘氏

「茶道名言の構造―歴史と思想・文学をめぐって」

田中秀隆氏

九月二十五日(土) (会場 五島美術館講堂 午後二時)

「煎茶七類について」

高橋忠彦氏

「千宗旦の茶の諸相」

中村静子氏

十二月十一日(土) (会場 根津美術館 午後二時)

「未定」

吉岡明美氏

「薩摩焼の茶碗について」(仮)

松村真希子氏

一月二十九日(土) (会場 根津美術館 午後二時)

「未定」

八尾嘉男氏

「茶道具の銘についての一考察(仮題)」

砂澤祐子氏

静岡例会

九月二日(木) (会場:掛川市・美感ホール 午後六時三〇分)

「茶道の今日的意義」

熊倉功夫氏

十月三十一日(日) (会場:静岡市・静岡県コンベンションアーツセンター)

「グランシップ」午後一時

(第四回世界お茶まつり実行委員会と共催)

第一部 講演

「世界に広がる茶の湯の文化(仮)」

谷 晃(茶の湯文化学会会長)

第二部 鼎談

熊倉功夫(林原美術館館長)

川勝平太(静岡県知事)

角山 栄(元堺市博物館館長)

東海例会 (会場:名古屋文化短期大学)

アセンブリ・ホール 午後六時

九月二十四日(金)

「江戸時代京都の名所案内図会『都名所図会』『都林泉名勝図会』」

廣瀬千沙子氏

「楽焼の窯」(仮)

仲野泰裕氏

十一月十九日(金)

「天王寺屋他会記に見る交友関係」

山田哲也氏

「茶の湯と金工」

長谷川まみ氏

近畿例会

七月十日(土)

(会場:池坊短期大学第一会議室午後二時)

「珠光の「和漢」について」

萩原英子氏

「茶の湯と能楽」の基礎的研究

―茶会記に登場する能役者たち―

岡本文音氏

九月十一日(土)

(会場:素心庵 午後二時)

「奥田正造の茶道教育とその実践」(仮)

杉谷朱美氏

「二条城行幸祭の遠州茶会について」(仮)

深谷信子氏

十二月十一日(土)

(会場:池坊短期大学第一会議室午後二時)

「未定」

「十八世紀日本の文化様相

―「槐記」を中心に―(仮)」

小林善帆氏

北陸例会

七月三日(土)

(会場:福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館会議室 午後二時)

「戦国城下町一乗谷の茶庭の紹介

―特別名勝一乗谷朝倉氏庭園朝倉館跡庭園を例に―

藤田若菜氏

三月二十六日(土)

「未定」

金沢例会

十月二十三日(土) 見学会十三時半〜十七時

集合時間 十三時三〇分

見学場所 金沢市立中村記念美術館前

成巽閣 兼六園

懇親会・宿泊 十八時三〇分〜二〇時

犀川温泉「滝亭」(金沢市郊外)

十月二十四日(日) (会場:金沢大学自然科

学レクチャーホール

午前十時〜十二時三十分)

「世界の茶文化と日本の茶文化」(仮)

谷 晃(茶の湯文化学会会長)

「加賀藩士の茶文化」

長谷川孝徳(北陸大学教授)

高知例会（会場 高知県立文学館慶雲庵茶室
午前十時～十二時）

六月二十七日（日）

「茶の湯文化学会二十二年大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

永吉溪滋・柏井 武氏

このほか十二時～四時まで「お茶事」を予定しています。 席主未定

お茶事をご希望の方は予めご連絡下さい
(参加費五千円)

(会場：高知県立文学館慶雲庵茶室
午前十時～)

九月十二日（日）内容未定

十二月十二日（日）

茶の湯関係文献を読み所感の発表

発表者未定

茶事（十二時～十六時）会費五千円

二月十三日（日）内容未定

一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時間 十時～十六時まで

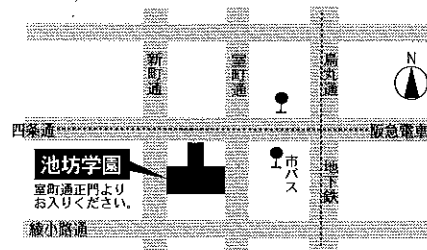
開催予定日 毎週日曜日を主体とする

(会費三百円)

会誌の論文募集

当会では会誌『茶の湯文化』に掲載する論文を募集しております。
投稿を希望される方は、当会事務局までご連絡下さい。ふるってのご応募をお待ちしております。

近畿例会々場（池坊短期大学）

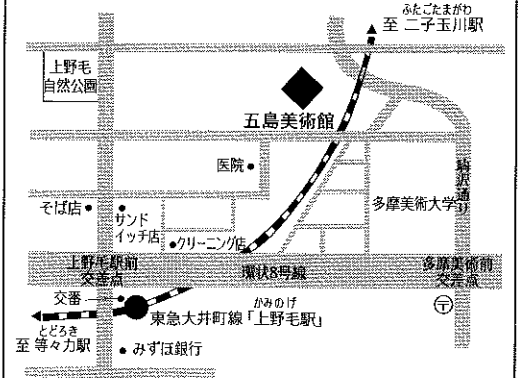


最寄り駅 地下鉄/四条駅/ 阪急/烏丸駅(地上出口26番)
市バス/烏丸四条

池坊短期大学・池坊文化学院

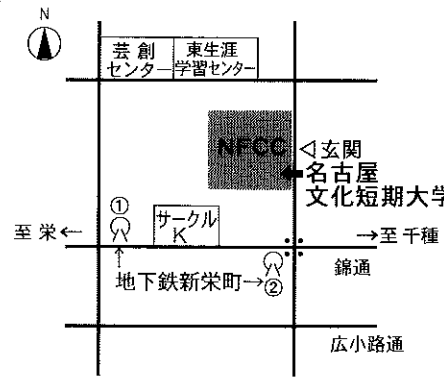
〒660-8491 京都市下京区四条室町鶏辨町 ☎0120-87-3852

東京例会々場（五島美術館）



〒158-8510 東京都世田谷区上野毛3-9-25
ハローダイヤル 03-5777-8600 / テープ案内 03-3703-0661

東海例会々場（名古屋文化短期大学）



アセンブリ・ホール（A館3階）

※明るいレンガ色の建物です。

〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目17-8 TEL052-931-7112